ジッドの『放蕩息子の帰宅』：状況に想をえた小品 (1)

吉井, 亮雄
北海道大学言語文化部助教授

<https://hdl.handle.net/2324/19384>

出版情報：流域. (25), pp.39-54, 1988-11-09. 青山社
バージョン：
権利関係：

ジッドの『放蕩息子の帰宅』⁽¹⁾

(二)

——「状況に想をえた小品」——

吉井亮雄

1

大胆な福音書解釈を、独特な文体と古典的な構成のなかに盛った『放蕩息子の帰宅』(以下『放蕩息子』と略記)は、アンドレ・ジッドが一九〇七年一月下旬に画家モリス・ドニを伴ったドイツ旅行からパリに帰った直後に着手され、実質的には約二週間で書き上げられた。自筆完成原稿にして二十六枚の小品ながら、この短期日の執筆・完成はジッドにあつては極めて異例のこと⁽²⁾で、先立つ状況を考慮すればなおさらその感が強い。彼は、一九〇四年の時点ですでに、「精神の憂鬱な麻痺」のために『背徳者』を書き上げた日(一九〇一年十一月二十五日)以来、もはや真面目な仕事は何ひとつしていない」と語っていた⁽³⁾。事実、いくつかの短い雑誌寄稿と、一九〇一年以前のテクストが半ばを占める旅行記『アマンタス』を除けば、見るべき著

作を発表していないこの五年間の『日記』には、ほとんど毎ページに、「恐ろしい老衰」⁽⁴⁾ 280」に対して募る不安が記されていると言つても過言ではない。知人たちもこの事実に関心ではありえず、たとえば、『放蕩息子』の初版を送られたエドゥワール・デュコテは、「長い沈黙を破った」と祝うことで礼状を始めるほどであった⁽³⁾。とりわけ、すでに十五年近い懐胎期間をもつ『狭き門』の執筆は一九〇五年春から難行していたし、もう一つの大作『法王庁の抜け穴』に至つてはようやく粗筋が固まっていたにすぎない。間近なものとしては、一九〇六年暮に、季刊誌『詩と散文』を主宰するポール・フォールから同誌次号の巻頭を飾る作品を請われて、「バルベール・ドールヴィイとフロール」に関する論文を自ら提案していたが⁽⁴⁾、計画が実行に移された形跡は皆無である。ジッドがドイツに旅立ったのは、このような惨憺たる状況下であつたのだ。

ベルリンで催される予定の旧作『カンドール王』の上演に立ち会

うためであったのだが、フランツ・ブライによるドイツ語訳の不出来と、同じ時期に巡業中のリュネリポールの「制作座」に観客を奪われるのではないかという危惧から、ジツドはこの旅行に大いに二の足を踏んでいた。結局、精力的なドニの説得にひきずられるように出発したのであるが、ベルリン到着後たちちに、ウィクトーア・バルノウスキーの指揮する「小劇場」側の不手際で上演不可能であると判明する。⁽⁵⁾以後、二人の滞在は、美術館や画廊の訪問、あるいは首都および近郊の旧知のドイツ人との再会に向けられるほかない。しかし、目的を失ったこの十日間が思わぬ収穫をもたらすのである。カイザー・フリードリッヒ美術館で見たイタリヤ・ルネッサンスおよびフランドル派の絵画や彫刻が特にジツドの強い関心をひいたことは、旅行中の『日記』にそれ以外の記述が一切ないことから窺われるし、⁽⁶⁾彼が実際にこの鑑賞体験から作品の発想を得たことについても、たとえば、キリストとその足に香油を塗るマリアを描いたディリック・ブーツの絵に関する「右の隅に跪いている寄進者が、マリアと向かい合っている」⁽⁷⁾、⁽⁸⁾という記述と、「祭壇画の隅の寄進者のように、私は跪いて放蕩息子と向かい合っている」という『放蕩息子』冒頭部の話者の語りとの表現・構成上の明らかな共鳴などから、疑問の余地はない。

執筆から出版までの経過はこれまでほとんど知られていないのでごく大まかながら触れておこう。ドイツから帰った翌日(一月三十一日)には、「冒頭部を書き終えてからでなければ寝ず」、以後彼の「精神

の沈黙と躍動を対話のかたちで描く」⁽⁹⁾に専念する。途中二度疲労を覚えながらも、二月十五日には、出来上がった部分を読み返し、「直すところはほとんどない」と大きな満足を示す。そして数日後にはすでに一応の完成を見るのである。ところで、ジツドは『放蕩息子』の仏独二カ国語同時出版(『詩と散文』三一五月号と、オスカー・ビーが編集するベルリンの月刊文学誌『アイエ・レント』五月号)の計画を遅くとも同月十二日には抱いていたのは確実で、⁽⁷⁾短い作品ゆえに実現が比較的容易であったとしても、彼にとって前例のないこの試みは、完成以前から自作に対してもついていた並々ならぬ自信を裏付ける。計画を遅滞なく実行に移すため、二月中にタイプ原稿を少なくとも三部作らせ、翻訳のために内二部を相前後してベルリンに送る一方、三月初旬にフランス語テキストを、マルセル・ドルワンとジャック・コポーの意見を交互に聞きながら、一週間かけて修正する。ジツドが次のようにふりかえって語るのはいこれらの作業が一段落ついた三月十六日である。

数日前、『放蕩息子』を完成した。ベルリンでいきなり詩の構成を思いついて、早速仕事に取りかかったのだ。着想後直ちに実行にかかったのは、これが初めて。あまりに長い間温めておくと、主題が膨張し、歪んでくる恐れがあった。というよりは、書かなくていいということに厭きがきていたし、私が抱いていた他の主題はすべて、すぐに取り扱われるにはあまりにも多くの困難を呈

つていたのだ。[J. 240]

続いて、同下旬に『詩と散文』の第一校正刷ができると、作品の献呈者と考えていたアルチュール・フォンテーヌにこれを送り、了解を求めた後、日をおかず修正を加え、フォールに戻す。しかし、同じころ校正刷に手を入れたドイツ語版が四月末ないし五月初めには出版されたのに対し、細心の下準備にもかかわらず、第二校正刷が大幅に遅れたフランス語版が出るのは六月初めになってからにすぎない。この予想外の遅滞を利用して、当初三十部とされていた初版印刷（詩と散文）掲載テキストの豪華紙刷版は六月に入って五十部に改められるが、こちらも遅れ、贈呈者を入念に選んでいたジッド「後述」の手に届くのは同月下旬である。

さて、異例の早さで書かれ、自信をもって出版された『放蕩息子』だが、その発想に書物（この場合は聖書）や絵画が寄与したこと自体は、たとえば『パリュード』の誕生を思い起こすならば、ジッドにあっては決して例外的なことではない。『パリュード』の「物語の形そのものは、ジッドによれば、三つの要素、つまり彼の精神状態、ゴヤの一枚のデッサン、ウエルギリウスの第一の牧歌の敷衍、これらの邂逅から生まれた」のだから。したがって、例外的なのは、幸運な外的偶然にあるというよりも、やはり、作家自身が言うように、そこから発想を得、その「主題が膨張し、歪んで」こないうちに実作にとりかからねばならなかった彼の〈精神状態〉であると考える

ジッドの『放蕩息子の帰宅』

べきであろう。そうであるならば、物語の意味と、物語が聖書の寓話および宗教画に対して見せる異同（間テキスト性と呼ぶべきか）をさらによく理解するためにも、まず次のように問わねばなるまい。つまり、なぜジッドは書けないでいたのか。そしてとりわけ、他のいずれの時期でもなく、一九〇七年一二月に、へ放蕩息子の帰宅」という題材を取り上げたのはなぜか。この基本的な疑問に答えるためには、作品執筆までにポール・クロードル、フランシス・ジャムとのあいだに交わされた関係の再考が欠かせない。なぜならば、『放蕩息子』の反響が現われ始めた直後の同年七月二日に、ジッドの言葉に従えば「作品の序文」としてベルギーの友人クリスチアン・ベック宛に書かれた手紙で、彼自身が執筆の背景を以下のように説明しているからである。

「……クロードルと「ジャム」が私にして欲しいと願っている行為がもたらす利益、にもかかわらず私がその行為をしない理由、そしてまた、仮にするとしても、なぜそれは、へ私の放蕩息子がへ家には帰るが、弟の家出に手を貸すために帰るといような仕方ではありえないのかということ、こういっただけを骨の髄まで承知していながら、私はこの「状況に想をえた」小品を書いたのであり、そこに私の心情のすべてと、そして同時に私の理性のすべてを注いなのです」¹⁰

2

ジッドが二十三歳の時（一八九三年）に文通が始められたジャムとの関係は、時を移さず頻繁かつ親密なものになる。しかし同時に両者の相違が明らかになるにもさほど時間を要しない。『地の糧』の作者は、詩人の才能を高く評価しながらも、宗教的題材を安易に扱ひすぎると批判せざるをえないのである。続いて、『背徳者』とジャムの『生活さまざま』をめぐって一九〇〇年から一九〇二年にかけて行なわれた論争が、両者の文学観の大きな隔たりを一層際立たせることになった。つまり、二人の書簡集を編んだロベール・マレが指摘するように、「ジッドは『生活さまざま』を文学的視点からのみ判断したのに対し、ジャムの『背徳者』への評価には倫理的要請が介在し、これが次第に距離を広げ、やがては溝を穿つ因をなすのである⁽¹¹⁾」。ジッドがオルテーズの詩人とのあいだに経験した紆余曲折に比べれば、外交官として外国駐在の多いクロードと彼の関係はそれほど深いものではなかった。一八九一―九三年には両者ともマラルメの『火曜会』に出席し（ただし、彼らの記憶によれば、ここでの面識はまだない）、一八九五年にはマルセル・シュウォップ宅で初めて顔をあわせていたが、文通が始まるのは現在知られる限りでは一八九九年になってからにすぎず、主として文学的な話題に限られたこれら初期書簡には儀礼的な色彩を否定できない。また、ジャムを伴った一九〇〇年春のクロード訪問でも、後に彼らの対話の核心をなすことになる

問題は、ジッドの内ではまだ大きく膨らんでおらず、触れられることはない。しかし以上については、マレをはじめ多くの研究者がすでに詳しく論じているのでこれらに譲るとして、本稿では、前章末に引用したベック宛の手紙にも記されるジッドの宗教問題を中心に三者の交流が活発になる一九〇五年から話を起こすことにしよう。

その芸術上の進展からも予想されたことだが、ジャムは、望んでいた結婚が破談になったのを直接のきっかけとして、この年休暇で赴任地福州から帰国していたクロードのふところに精神的な励ましを求める。そして七月には、この友の行なうミサによって聖体拝領をするのである。ジッドもまたクロードの影響を受け始める。

四月に、ジャムのカトリシスム復帰を促すためにクロードが書いていた手紙を識ると、彼は、「まるで僕自身に宛てられているかのよう⁽¹²⁾にそれを読んだ。怖ろしかった」[C.G. 26]と告白する。翌月、『黄金の頭』の素晴らしい第一巻「を妻マドレーヌに読み聞かせ、続いて、『ミューズへの頌歌』のなかに「一カ月近く待ち設けていた〈警告〉のようなもの」を感じ、「全存在を揺り動かされる」[C.G. 26]。やがて、『日記』には、彼の迷いが、しばしばカトリシスムの文脈のなかで記され始める。たとえば九月一日には次のような一節が見られる。

「……私の持っている最も美しい徳は墮落してしまい、私の絶望の表現さえも鈍ってしまった。」

こうしたものに対して私を守ってくれたであろう徳を、どうして馬鹿らしいなどと思うのだ！ 私の理性はこの道徳を批判もし、また同時に求めてもいる、だが求めても無駄なのだ。私は聴罪司祭を選び「……」彼に言うであろう。どうぞ、私に最も恣意的な規律を課して下さいませ、今日は私はそれを賢明なるものと申しませう、と。私の理性をして冷笑させるようなある信仰に私がしがみついているとしても、それは、そこに何か自分自身に抗する力を見いだしたいと願っているからなのだ。』 [175b]

このような双方の経過を従えて、ジッドと、すでに教会の教義のもとに固く結ばれた二人のカトリック作家とのあいだに真の対話が始まるのは同年末からである。

十一月三十日、ジッドは、ジャムがカトリシスムへの復帰を自ら祝うために書き上げた『木の葉をまとえる教会堂』を、作者の依頼に応じ、フォンテーヌ家でクロードルらを前にして朗読する。練習に励んだ前後には、ジャムに宛てて、「今夜僕はすでにカトリック教徒だった」と詩の敬虔さを称賛するとともに、クロードルとの出会いに寄せる大きな関心を打ち明けている [CG, 217]。クロードルの方でも、これまで文通相手の宗教問題には一度も正面から手をつけていなかっただけに、一層この朗読受諾に改宗の前兆を見ないわけにはいかなかったのである。翌日のジッドの『日記』は、クロードルの外見的な描写と交わされた文学談義の再現に重点を置いている

が、五日後自宅での昼食を機会にした二度目の出会いについての記述には、この招待客に対する彼の両義的な態度が窺われ始める。自分の方から始めた宗教論議で、「ではどうして改宗しないのだね？」と切り返されて、狼狽を隠せない反面、芸術と宗教の両立という確信のもとに「聖体顕示台を振り回して、我々の文学を荒らす」カトリック作家の主張に素直に同意することができないのである [CG, 218]。同日夜、クロードルは、「私は魂を心底から愛しています。あなたの魂は私にとってとりわけ大切なものなのです」 [CG, 218] と書き送るのだが、これに対するジッドの返信も、『日記』の記述と同様に、内心の葛藤を反映した両義性を示している。一方では、相手の説得には従えぬ理由を、芸術と宗教の関係に再び言及しながら次のように説明する。

「……」あなたは魂を愛しているのだから、そういう魂のなかには、なによりもまして実践にもとづく穩健な宗教を嫌う者があることはお分かりになるでしょう。また、人生の始めに、私が聖書を読んでそれを日々の糧にし、祈りを第一の欲求とした後、キリスト教徒が「偽りの神々」と呼ぶもののなかに一層多くの光明を見いだせると考えて、芸術と宗教の何かよく分からぬ煮え切らない妥協よりも、当初の信仰とこのうえなく急激に手を切る方を選んだということがお分かりになるでしょう。

このようにクロードルの主張の無効化を図りながら、同時に、議論を依然開かれたものしておくために、プロテスタンチスムよりもカトリシスムの方がキリスト教芸術家という概念に抵触しにくいと認め、また、この会談が「解決ではないが——それを望むのは馬鹿げたことだ——新たな、容認しうる闘争姿勢」を垣間見させてくれたと感謝する。加えて、「異教的な道を通じて聖性に到達することの難しさ、恐らくは不可能」が自分をさいなんでいるだけに、「聖人たるという絶対的義務」に対するクロードルの確信に満ちた勧告にひどく動揺したと告白し、「ああ、あなたとの出会いを恐れたのはなんと正しかったことか！ 現在では、あなたの荒々しさがどれほど恐ろしいことか！」と叫ばないではいられないのである〔CG, 83〕。この基本的に曖昧な態度に、改宗勧告者は素早く応え、作家の天職は「魂の導き手」たることだと再び強調し、ジッドがクリスマスまでには自分の傍らで聖体拝領をすることを期待する。しかし、ジッドは、今度は正面からは応じず、アンリ・ゲオンに宛てて、「クロードルは僕に一種の宗教的台風を吹きつけてくる。これは僕を上から下まで揺さぶりはするが、しかし、僕を納得させるといふよりもむしろ疲れさせる」⁽¹⁵⁾と、かなり調子の異なる冷静さを見せる。クロードルは諦めはしないが、議論のまいた種子が迷える魂のなかで実を結ぶまでは、攻撃の手をしばらく緩めるべきであると判断したのであろう。続く数週間に交換される双方の手紙は、「禁じられた話題」〔CG, 83〕を避けつつ、次第に短くなり、ついに、翌一九〇六年三月まで一言

も交わされなくなる。そして、クロードルが、新たな赴任地天津に向けて出発する直前の同月半ばに、カトリシスムの問題に再び立ち戻るために書く手紙は返信を得られぬままに終わる。ジッドはこの手紙を「大変美しい」〔CG, 83〕ものと思うが、同時に、「水に身を投げる人」〔CG, 83〕の姿をそこに見てしまうのである。

3

ジッドの精神状態を続けて追うまえに、彼がクロードルに接近しようとした理由について触れなければなるまい。たしかに、この時期の『日記』や、クロードル宛の書簡は、ジッドの精神的不安を如実に物語っているし、さらには、すでに教会の教義に従い始めていた幾人かの知己のように、彼が、カトリシスムの安定感にひかれ、切実に改宗を考えていたのではないかとさえ思わせる。しかしながら、心の平安に対するこの希求は、何よりも、長期間にわたる創作不能状態から生じていることを看過してはならない。事実、ウルガタと教種の仏訳・英訳を注意深く比較対照しながら福音書を読み耽る『汝も亦……?』の時期（一九一一年）とは大きく異なり、この時期には、『日記』に現われる宗教的問題に関する記述の多くが、他作家への言及、しかもしばしば痛ましい劣等意識をとまなう言及と連なっている。ジッドにとっては、問題は、生活のなかに埋没した個人に対してではなく、常に、芸術作品を通してしか表わされえ

ない自我に対して提出されるのであり、その意味において、ダニエル・ムートトが言うように、クロードルへの関心と接近は、とりわけ、同時期に再開された『狭き門』の執筆に欠かせぬ宗教的環境に身を置くという芸術上の要請から来ると考えるべきであろう。なぜならば、ジッドがアリサの物語を描き尽くすためには、神への献身のために過度の自己犠牲を選ぶにひとまずは同化しなければならぬからである。しかし、『狭き門』執筆の本来の目的は、一面において自己の分身たる主人公の選択を最終的には否定し、それにより自己解放を目指すことであるから、芸術的射程をもつこの宗教的擬態には、作家の「創造的自我を、それが逃げ去りたいと願う方向に逆に追い込んでしまうという危険⁽¹⁶⁾」が必然的に付きまとう。それは、作品を放棄し、自らの創造力に対する自信回復は到底望めない現在の停滞に甘んじるべきか。あるいは、自己犠牲に抗する理由、すなわち作品を書く理由そのものを失う覚悟で、主人公と同じ道をさらに突き進むべきか。これこそが、『背徳者』完成以降、ジッドが出口を見いだせずにいる大きなジレンマの一つとすべきであり、この点を換言するピエール・マッソンの次の指摘は正しい。つまり、

「彼が作品を前にして陥る麻痺状態は、彼が作品に虚偽を語らせようとするに由来しているのである、なぜならば、彼は自分自身の現実の姿を作品に批判させようとしているのだから⁽¹⁷⁾。こう考えると、当初ジッドが、宗教と芸術の乖離に悩まされることはないと言言するクロードルとの接触に問題解決の模範的契機を期待したことはもはや疑いえない。だが、現実に対話が進むにつれ、相反する諸要素の葛藤をあくまで芸術の支配のもとに描こうとする彼にとっては、詩人の主張はあまりにも教条的に聞こえ、したがって期待したほど有効ではなく、危険ですらあると思われたのである。しかし、議論はジャムとの対話に引き継がれ、大きな変化を迎える。五月初めに、彼から「君は水に浮く浮子のように不安だ」[CIG, 235]とする手紙を受け取るや、ジッドはこれまで続いていた誤解を晴らす決心をする。

「……」僕はおそらく天国の入口にいるのだろうか、それは君が思っている入口とは違うのだ。「……」

たしかに、クロードルは大いに僕の役に立った、しかし君が考えているようにはない。彼の日記や手紙を読むことで、僕が彼の人柄に抱いていた共感や彼の作品に対して持っていた賛嘆の念が及ぼす働きが幸いにも妨げられたのだ。最後には反作用が作用に大きくなってきたというわけだが、まさにこのことで僕は彼に感謝しているのだ。[CIG, 236]

オルテーズの詩人が、友の間近い改宗を祝うために準備していた論文を放棄する旨をもって憤然とこれに応えようと、ジッドは、同月十六日の手紙で、自分とクロードルのあいだには「仲違い」はなかったことを強調しながらも、「クロードルに彼の神があるというなら

ば、僕には僕の神がある」[CIG, 283]と再度同じ立場を繰り返すのである。

ところで、この決然とした態度表明自体に劣らず注目すべきなのは、それが、一部の研究者の唱えるようなジツドの「肉体および精神の両面における苦悩の消滅」⁽¹⁸⁾を証言するどころか、逆説的な結果として、とりわけ精神面での重大かつ急速な悪化を伴うことになるという点である。月半ばにマドレーヌとキューヴェルヴィルで味わう郷愁をまじえた彼の安らぎも長くは続かず、パリに戻るや、以前にもまして不眠と「自尊心を鋭く刺す苦痛」⁽¹⁹⁾に悩まされ始める。『日記』の記述は日に日に短くなり、ついに二十五日にいたって彼は、震える手で、「悲しみ——迷い。この日記はここで打ち切ろう。恐ろしい疲れ」⁽²⁰⁾とのみ書きつけ、翌々日には、青年期に治療を受け、信頼をおいていたアンドレ博士の診察を受けるために、最後の力をふりしぼるようにしてジュネーブに向かうことになるのである。

肉体的健康そのものの悪化のほか、この痛ましい急変を準備した要因をいくつかのレベルに求めることができよう。まず、ジツドが旅行、特に北アフリカへの旅行から得るものの変質を見逃すことはできない。かつては、彼の「ノマディスム」を体験として支え、創作の原動力として寄与した旅行は、徐々にその効力を失い、『アマタス』に集められた旅行記が示すように、苦い後味をのこすようになる。結婚生活の進展にしたがい、この「ノマディスム」の意味

を対立項として支える、妻とキューヴェルヴィルの家に対する感情が複雑化していくことも無視できない⁽¹⁹⁾。また、パリでの生活様式にも新たな混乱が加わる。旅行の無力化を補うかのように、オートウイユに建設中のヴィラ・モンモランシーに、ジツドは意識を集中できる場として多大な期待をかけていた。しかし、一九〇六年二月に完成した館は、建築家ボニエのあまりにも奇抜な設計のため、快適な居住空間には程遠く、失望といらだちしか与えないのである。

感情生活の面においても、以前のような充足感のはぞめない。ゲオンと共有したモリス・シュランベルジュとの恋愛は、渦中の高揚や、思い出を汚すまいとする事後の努力にもかかわらず、数カ月で破局を迎えていたし、同じ頃、その助言者たらんとした甥ポール（『日記』中のジェラルム）も期待はずれで、次第に彼の自立性を脅かす重荷になっていた。

だが、ジツドが自分を捕らえて離さない悪循環を最も意識するのはやはり創作の場においてであって、依然として進まぬ「狭き門」のみならず、最近の出版『アマタス』のほとんど完璧な不成功が追い討ちをかける。幾分誇張をまじえて、「権威ある批評家、ジャーナリスト等のだれにも一度も本を送らず、これまで注意深く批評界の沈黙を自ら保ってきた」⁽²⁰⁾と言いつつ、作家はこの沈黙を「少し過剰に」[CIG, 284]意識せざるをえない。ましてや、ジャン・ド・グルモンやルイ・ルアールの書評の申し出は、彼らの無理解が分かるだけに、ただ彼をいらだたせるだけであった。

以上のように、この時期は「自己表出が不可能な孤独のなかに自我を追いつ込む禁忌と嫌悪」⁽²¹⁾に包まれていたのであり、ジャムの返信がとどくのは、そういう窒息状況のなかで、ジュネーヴへの出発の数日前、まさにジッドが「ちょっとしたへ障害」にも影響をうける」^[J, 22]と嘆く五月二十一日のことである。

君の手紙は不安に満ち、悲痛で、いらだっている。どうして君は僕が君を恨むのを望むのだ。誤解があったという点で問題ははっきりしたのに、僕の親愛なるクロードルや、聖霊に対する罪や聖体の秘跡についてなぜ長々と議論を続けなければならぬのだ。

[JG, 238]

対するジッドは『日記』にこのうえなく不愉快 (blesante) な手紙^[J, 23]とだけ報告する。たしかに、以前のジャムの手紙と比べて、この短信がことさら新たな毒を含んでいるとは思われないが、自らを「対話的存在」と認めるジッドにとっては、予測しえたこととはいえ、文通相手の対話拒否が与えた「傷」は決して小さくなかったと推測できる。しかし、我々にとって重要なのはむしろ、この「傷」がその痕跡を長くは残さないものであるのか否かという点である。はたして、後に再開されるオルテーズの詩人との手紙のやりとりは、ベン・ストルツファスが「明らかにジッドはジャムと戯れているのだ」⁽²²⁾と断言するように、前者が意図的に始めた遊戯の結果には

ジッドの『放蕩息子』

かならないのだろうか。そしてまた、彼は、マッソンが示唆するよう⁽²³⁾に、八カ月後の『放蕩息子』執筆時には二人の改宗勧告者の亡霊をみごとに追い払っていたのだろうか。だからひいては、この作品はもはや解消した苦悩についての幸福な証言と考えるべきなのか。事実は大きく異なる。以下、そのことをかいつまんで述べよう。

4

先に触れたアンドレ博士の診察内容については、まもなくジッドが処方に従い、かつてラ・ブレヴィーヌでしたように、チューリッヒに近いシェンブルンで水浴療法をうけたこと以外あまり分かっていない。ただ、一八九四年の診察のときに、博士が患者の抱える障害の性的要因を見逃したはずはありえないと精神医学者でもあるジャン・ドレが考えるのに対し⁽²⁴⁾、ムートトは、ジッドがその性的傾向を初めて告白したのは、この一九〇六年の診察においてであり、以後「彼は、その性的特殊性を異常と見なすのをやめ、内心の平和とともに、個性の全面的な復聖を手にする」⁽²⁵⁾と言いきる。いずれの解釈も決め手となる資料を欠き、推測の域を出ないのだが、少なくとも、その後数カ月のジッドの手紙を読む限り、二度目の診察にムートトの言うような即効性があったとは思われない。シェンブルンに治療に向かう直前の六月五日、ジッドは親しい友人ウージェーヌ・ルアル（前出ルイの兄）に宛てた手紙で、「ひと月来苦しめられ

ている恐ろしい疲れ」について述べ、末尾に「最近ジャムからこのうえなく耐え難い手紙をもらい、それは三晩僕につきまとい眠れなかった」とつけ加える。⁽²⁶⁾十日後の彼はサナトリウムで「骨髓の鬱血の除去に努め」⁽²⁷⁾ているが、七月に入ると、アンドレ博士に不安を訴えざるをえない。「私は一日中脳貧血に悩まされ、これは長くは続かないのだと絶えず自分に言い聞かせていなければ気分を保つていられません」⁽²⁸⁾。同月二十一日に面会に来たマドレーヌも「彼の体力は戻ったとしても、神経はまだ過敏である」⁽²⁹⁾ことを見逃さない。そして八月半ば、治療を終えキューヴェルヴィルに帰った後、ジャムから最近作を送られると、ジッドは三カ月ぶりで詩人に長い手紙を書き、少なくとも友情だけは失うまいという唯一の気遣いに対して自分が受け取った不当な報酬にいかにか傷つき、現在も苦しんでいるかを知らせるのである。

「…」君が一言つけ加えて、あんなにひどい書き方をして僕を傷つけるつもりはなかった、あの手紙を読んだときと同じように今もなお僕が喘いでいる苦痛はただ性格の違いの結果にすぎないのだと言ってくれたらもっと嬉しかっただろうが。

「…」君が自分のことばに含まれる残酷さに気づいていないことは僕には確かだ、あるいはそうでないにしても、僕が君に抱いている愛情に君はほとんど値しない。

君が優勢であるのは、僕がこの三カ月苦しんでいるだけに容易

なことだ。絶え間ない不眠で最後には僕は仕事をすべて、文通をほとんどすべて、そして読書さえもやめなければならなくなったのだ。[CJG, 299]

ジャムは、友人のおかれている状態について全く知らなかったと謝したうえ、自分の論文はただ中断されているだけであって、決定的に放棄されたわけではないと釈明する。滞在中の保養地ペロス・ギレックでこの返信を受けるや、ジッドは感情の高揚を隠さない手紙を返し、ジャムにまして自分の心の内奥に潜むものを見透せる者はいないと、詩人の主張をある程度認めさせる。このため、九月半ばにキューヴェルヴィルに帰った彼は「憂鬱な問題についてはかなり立ち直った」⁽³⁰⁾と思うのだが、しかし、それはあくまで一時的な復調にすぎず、リュイテルス、コポー、ベックら親しい友人への便りをふたたび嘆息が満たしはじめる。そして、翌月、再度ジャムから長い教訓を聞かされるにおよぶと、かなりの間において「僕の無沙汰は腹をたてているからではない」[CJG, 305]とだけ短く答え、その理由を「日記」に「ジャムにこんな平板な書き方をするのは実に辛い。だがほかにもどんな書き方があるだろう……彼の鼻はもう香の煙にしかかかないのだ」⁽³¹⁾と記すのである。以上のような経緯をたどった後、彼が、まだ抜けきってはいない危機をそれでもかなり距離をおいて眺められるようになるのは、ようやく年末近くになつてのことではないかと思われる。十二月初めに、ポール・フォー

ルに「夏と秋を通してずっと、ひどく疲労した脳を当てにしなければならなかった」⁽³¹⁾と語った後、二十日には、ジャムから続けざまに激しい非難を受け慨嘆するリュイテルスに次のように応じている。⁽³²⁾

ジャムのこれらの手紙が君を苦しめたことはよく分かる。しかし、僕はそれに驚きはしない。「……」この春同じような手紙が僕に与えた傷は治るのに何カ月もかかった。僕たちだけが傷を負ったわけではない。僕はほかにも知っているのだ。だが君は何を望むというのだ。真面目に対応しようなどとせずに、彼の友であることに同意しなくてはならない、そして、僕たちの彼に対する評価とともに、彼への愛情を衰えさせないようにすることだ。「……」それに、ジャムが意識しているのは自分の長所だけだ。だからどんな弁論を試みても無駄なのだ。

そしてさらに言えば、友情に煩わされぬ者たちよ万歳だ。——ただ、ジャムがニーチェ主義者と違うのは、彼にとってはこの冷酷さが生来のものであり、しばしば僕たちにあるののように、辛い努力がはからずもそうなってしまったというようなものではないことだ。

すでに明らかのように、精神的回復は極めて緩慢にしかなされない。そして、一連の証言で最も注意すべきは、ジャムの「このうえなく不愉快な手紙」への一貫した遡及であり、ジッドがこれを、危

機の直接の原因とは言わないまでも、少なくとも引き金と考え続けていることである。また、彼の精神的回復の過程が、詩人に対する態度の段階的変化、つまり、自らのニーチェ的な「辛い努力」を理解させたいという強い願望から、二人を隔てる癒しがたい相違に対する苦い認識への推移と対応していることも看過できない。そのことは同時に、宗教的議論においては「恐るべき外科医」クローデルに比べ「ひとの好い、いかにも力量に欠ける田舎医者」⁽³³⁾と従来軽視されがちなジャムの存在が、この時期のジッドの精神生活に及ぼしていた影響の大きさを証明することにもなる。

しかし、ジッドの揺れ動く精神状態は、『放蕩息子』執筆に先立つベルリン旅行へのためらいにとどまらず、作品完成後に彼がクローデル、ジャムに対してとった態度においても依然として認めうるのである。作品の意味を問ううえでも見過ごせないこの点を、筆者が参照しえた二つの未刊文献の紹介をまじえて、引き続き確認することにしてしよう。

5

一九〇七年の二月二十二日から八月までの記述を収める『日記』⁽¹⁾ 自筆原稿（カイエ23）の中には一つの人名リストが見いだされる。日記としては使われずに終わった末尾部分のうち三ページを上下逆転して作られたこのリストには、黒インクで書かれた箇所に、ヴァレ

リー、フィリップ、アンリ・ド・レニエ、レオン・ブルム、モン・ポール、ポール・デジャルダン、ルドン、レーモン・ボヌールをはじめとするジッドと親交のあった作家、文学者、画家、作曲家等の名前が二十九、続いて鉛筆で書かれた箇所、これらとの重複をいくつか含んで、知名度の劣る十一の名前（たとえば、マドレーヌの友人であるマチルド・ロベルティ、リタ・ゲイ等）が並んでいる。説明的記述はないが、いくつかの指標と呼ぶべきものによって、インク書きの箇所が、『放蕩息子』の抜刷が三十部に定められていた時点での初版献呈予定者一覽に相当するものであることは疑いえない。⁽³⁴⁾ 作家がその読者として重視していた同時代人の顔ぶれを伝えるという意味で興味深いこのリストには、たしかに、あつてしかるべき名前がいくつか欠けてはいるが（たとえばジャン・シュランベルジュ）、なによりもその重要性は、明らかに意図的なもの。一つの欠落、つまり、作品執筆の動機として作家の念頭を離れることになかったクローデルとジャムの名前の欠落に求められるべきである。なぜならば、かなり早い時点で、ジッドが特に二人には作品の完成を報告していた（フォンテーヌに献ずるのでないならば、あなたに献じたであろう『放蕩息子』云々「クローデル宛三月十四日付書簡 OCG. 72」）だけでではなく、彼らのほうでも、改宗の新たな可能性を探らんと、出版を心待ちにしている旨を作者に知らせ、作品の送付を要請していたからである。リスト作成の正確な日付については未詳ながら、少なくとも、ジッドの矛盾するこの態度には、作品そのものに置く自負とは裏腹に、二人のカトリック作家の反応に

対して抱く消し難い不安と怖れを見ないわけにはいまい。

しかしながら、『放蕩息子』が呼びおこす最初の反応は、六月下旬に抜刷が各方面に発送されるまでに、皮肉にもオルテースから届く。『詩と散文』誌上で作品を読んだジャムは、三カ月前に「お互いの宗教上あるいは哲学上の信念」[OCG. 26] については触れないようにしようと自ら提案していたにもかかわらず、とりわけ寓話の結末に憤慨し、⁽³⁵⁾ 容赦ない批判を作者に送るのをためらわない。美学的評価は別にして、ジッドが相変わらず「ニーチェ信奉」にとりつかれていると厳しく断罪するのである。

ジッドはこれを無視し、返答しなかったと従来考えられてきた。

しかし、前述のリストを含むカイエ 23 は、ここでもまた貴重な資料を提供する。ジッドは詩人に宛てた二通の手紙の写しを取っていたのである。正確に言えば、内一通は発信されず、もう一通によって代えられたものである。彼は、理由も記しており、はじめに書いた手紙を送るまえにジャムの手紙を読み返し、それが「最初思われたよりもはるかに美しく、また優しさにも欠けていない」と考えるにいたり、別の手紙を書いたとしている。七月二日の日付をもつ第一の手紙は、思想家としての自分と感覚的な詩人との資質の違いを「果実」と「花」のそれに譬えることで始まり、後段では、したがって、自分の作品（放蕩息子）においてジャムが「余計な屁理屈」と見なすものは「血と涙に充たされ」ているのであり、自分にあつては「脳が心臓のように脈打ちうる」ことを認めてもらいたい、と短

く終わる。これに対し、日付を欠く第二の手紙は、量的に膨らみ、修辭もはるかに豊かになっている。まず、その不興にもかかわらず詩人こそが、「放蕩息子」を愛するであろう誰よりも作品を理解していると強調する。続く主要部分は、相手の主張の具体的内容に触れつつ、第一信で訴えられていた要請から、詩人の深い洞察の顯揚へと大きく比重を移す。「君は、僕の作品を読んで、脳が心臓のように脈打つことができることを十分に感じてくれている。そして、君が見事にもキリストの冠の荆棘になぞらえる僕のこの強情で、痛みをとまぬ思想」云々。そして最後は、ジャムの手紙の末尾に込める美しい修辭で結ばれるのである。⁽³⁶⁾

二通とも、「放蕩息子」における「精神の沈黙と躍動の対話」の真正性を主張する点では変わりないのだが、しかし、この明白な調子の変化をどう解すればよいのだろう。作家自身が注意書で示唆する心理的要因はどのように介入したのだろう。私見では、この二通は、第一の手紙と同じ日付をもち、作品の言わば「序文」として書かれたベック宛ての手紙「すでに一部引用」との関連において読まれねばならない。ジッドは、自分とジャムの資質の違いを語るのに、これまでも「果実」と「花」の比喩を用いていた。第一信についても同様であった。しかし興味深いことにベック宛書簡には、「私にとっては、芸術作品を果実に譬えるよりも樹皮にできる瘤 (bale) に譬えるほうがふさわしいのではないか」と、この比喩の使用へのためらいが述べられているのである。それに呼応するように、第二信では、著し

い修辭の増加にもかかわらず、同比喩は姿を消している。このことから、ジッドが詩人への反駁にとりかかったのは、作品の成立事情をまったくあずかり知らぬベルギーの友人に長い説明的「序文」を書く以前であると見なしてさしつかえあるまい。一方、第一信を「送るまえに」ジャムの手紙を読み返し、これを捨てたと明記する注意書思い出すならば、第二信が書かれたのは、七月二日中、あるいは日を移して、のいずれにせよ、ベック宛書簡のあとと考えてもさほど無謀なことではなからう。以上から、計三通の手紙について、その起草の時間的順序を、ジャム宛第一信、ベック宛、ジャム宛第二信、と推定しよう。それではここからどのような結論を導きだすべきか。深読みの危険は避けるべきだが、我々が立ち会うのは、多少とも怒りを隠せなかった人間(ジャム宛第一信)が、自分自身についても、また自分を取り巻く状況についても明晰な視点を要求するエクリチュール(ベック宛)を通して、作家的意識、あるいは、その差異において他者を理解するという芸術家に求められる姿勢、つまり、「真の善良さ」とジッドが呼ぶものを取り戻す(ジャム宛第二信)心理的メカニズムの場なのではあるまいか。

とは言え、彼はこの一件から、クローデルが示すであろう反応をもはやはっきりと予想し、翌年によく覚悟を決めるまで、相手の二度にわたる催促にもかかわらず、作品を送るのをためらい続けるのである「クローデルの反応等については後述」。今まで見てきた諸点を考慮するならば、ジッドが、二人の論敵との関係をはじめとする様々

な困難を、『放蕩息子』以前に解消していた、あるいは同作執筆によって一挙に追い払ったとは到底思われない。彼にとつての問題はむしろ、現時点では解決しえない苦悩をいかに表現するかであったと考えるほうが前提的には自然であろう。したがって、作品自体にその形式上の反映を求めるのも故無しとしない。このような問題意識に基づき、必要に応じて作者の伝記的事実を喚起しつつ、以下、テクストの読解を試みる。

註

(1) 本稿は、筆者が一九八七年六月パリ・ソルボンヌ大学に提出した第三期課程博士論文『アンドレ・ジッドの「放蕩息子」の帰宅——批評校訂版の試み』(A4版タイプ三六〇ページ)の序説の前半部に依拠する。量的にかなりの未刊資料を含む同学位論文自体は、若干の修正を加えたうえで刊行予定である。このため本稿においては、紙数の関係および版權上の配慮から、上記資料からの直接的引用を最小限にとどめ、情報を提供する各資料の出典を明記してこれに代える。なお、パリ大学付属ジャック・ドゥーセ文学図書館所蔵の資料については、ドゥーセ文庫と略記したのち整理番号を付す。また、公刊されたジッドの『日記』およびクローデル、ジャムとの各往復書簡集 (*Journal 1889-1939* [4e édition], Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1948; *Correspondance Paul Claudel-André Gide 1889-1926*, Gallimard, 1949; *Correspondance Francis*

Jamnes - André Gide 1893-1938, Gallimard, 1948) からの引用については、それぞれ J, CCG, CJG の略号を用い、ページ数とともに、文中「」内に示す。

(2) ジッドの作品の多くが長い懐胎期間をもつことは、彼自身ですでに一九三一九四年に次のように述べている。——「想像力(私における)が着想に先立つことは稀である。私を熱狂させるのは着想であって、想像力ではない。しかし、着想は、想像力がなければ、何も産み出さない。「…」私にあっては、作品の着想が何年も(想像力)を働かす時期に先立っていることがしばしばである」[J, 497]

(3) ジッド宛一九〇七年七月五日付未刊書簡、ドゥーセ文庫、486-493。

(4) フォール宛一九〇六年十二月八日付未刊書簡、オテル・デ・ベルグ競売カタログ(ジュネーブ、一九八四年六月九日)。カタログ作製者は、発信地をローマとするが、これは明らかにパリの誤記。

(5) 『カンドール王』(一九〇一年出版)のベルリン公演が実際に行なわれるのは翌一九〇八年一月である。この間の事情については次の論文に詳し。Claude MARTIN « Gide 1907, ou Galatée s'approprie », *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, mars-avril 1970, pp. 196-208.

(6) 正確には、旅行中に他のノートが取られなかったとは考えにくく、このうのは、当該テクストは、『日記』自筆原稿(カイエ 22, ドゥーセ文庫、r 1578)の中では、他の手帳から切り取られ挿入された五枚の紙片からなっているからである。しかし、逆に

この事実が、記述された絵画・彫刻の鑑賞体験が『放蕩息子』の生成において持った重要性を、ジッドが後になって(恐らくは同エッセイ初出のガリマル版全集「一九三二—一九三九」の出版に際して)強調しようとしたことを物語っている。

(7) 『日記』自筆原稿(前出カイヒ)は、二月十二日に対応する箇所(52頁)に、会うべき人物としてフォールの名を、手紙を書くべき人物としてビーの名を記している。詳述は避けるが、これが同時出版に関連するものであることは、同時期に書かれた他の未刊資料数点から明らかである。

(8) フォンテーヌ宛「一九〇七年三月」二十五日付未刊書簡(個人蔵による。なお、ドイツ語版(シュルツェンガー訳)にはフォンテーヌへの献辞はない)。

(9) Germaine BRÉTE, *André Gide l'insaisissable Prole*, Société d'édition « Les Belles-Lettres », 1953, p. 68.

(10) André GIDE, « Lettres à Beck », *Mercure de France*, nos de juillet et août 1949, p. 621.

(11) Robert MAILLET, *François Jammes. Sa vie, son œuvre*, Mercure de France, 1961, p. 218.

(12) CCG の『序文』(『Clandel Studies』の「Clandel and Gide revisited」特集号 (vol. IV, 1977, no. 1) の各論文等を参照)。

(13) 二人の関係を扱った研究の大半が、後に言及するクローデルの十一月七日付書簡「CCG, 58」を引いて、彼の方から改宗勧告の目的でジッドに接近したとするが、ノッカーマンが説得的

な論証によって手紙が実は「十二月七日」の誤記であると訂正してからは、その根拠は失われたと言わねばならない。また、同じく後に引用するジッドの手紙「CCG, 58-59」を現行書簡集が十二月八日とするのも、明らかに同月七日の誤りである(クローデルはこの手紙に対して即日返答したわけである)。V. J. NOKERMAN, « Paul Claudel et André Gide. A propos de la Correspondance », *Les Lettres Romanes*, Université catholique de Louvain, février 1952, pp. 57-62.

(14) V. CCG, 52-4 (註出参照)。

(15) *Correspondance Henri Gheon-André Gide*, Gallimard, 1976, p. 622.

(16) Daniel MOUTORE, *Le Journal de Gide et les problèmes du moi (1889-1925)*, P. U. F., 1968, p. 177.

(17) Pierre MASSON, « Le Retour de l'Enfant prodigue : problèmes de création et d'interprétation », *Bulletin des Amis d'André Gide*, no. 41, janvier 1979, p. 41.

(18) Catharine H. SAVAGE, *André Gide. L'Évolution de sa pensée religieuse*, Nizet, 1962, p. 119.

(19) この点に関してノッカーマンは見事な解釈を示す。「ノッカーマンを通して彼「ジッド」が何よりも推し進めねばならぬのは、当初妻を同行させることで認めさせようとしたが、以後は独りであるか、あるいは全くしないかのいずれかに甘んじるほかに生活様式を正当化し、合法化してくれるような新たな戦略なのだ。しかし、彼のなさんとすることは最初の旅行の頃よりもはるかに困難なのである。なぜならば、家庭の後見(これは彼

の拒絶(拒絶)に単純にとびつくのではなく、最初の旅行がもつてきた解放的な面とマドレーヌから取り付けらるべき同意を両立させなければならぬからである」(article cité, p. 38)。

- (20) « Lettres à Beck », op. cit., p. 399.
- (21) MOUTORE, *op. cit.*, p. 183.
- (22) Ben STOLZFUS, *Gide's Eagles*, Southern Illinois University Press, 1969, p. 94.
- (23) MASSON, *article cité*, p. 40.
- (24) V. Jean DELAY, *La Jeunesse d'André Gide*, Gallimard, tome II [1957], pp. 333-5.
- (25) MOUTORE, *op. cit.*, p. 184.
- (26) ルール宛一九〇六年六月五日付未刊書簡「ジッドは七月五日と誤記」『トゥーセ文庫』Ms 8645 α 6/12。
- (27) リュイテルス宛未刊書簡「一九〇六年六月十七日発信」『ドゥーセ文庫』γ 148-144。
- (28) Catalogue de l'exposition *André Gide*, Bibliothèque Nationale [Paris], 1970, p. 106.
- (29) *Correspondance Henri Gheon - André Gide*, op. cit., p. 648.
- (30) *Ibid.*, p. 651.
- (31) フォール宛十二月八日付書簡、前出。
- (32) ジッドはリュイテルスに宛てられたジャムの二通の手紙の写しを取っている(『トゥーセ文庫』γ 148-150、未刊)。以下の引用はリュイテルス宛一九〇六年十二月二十日付未刊書簡『ドゥーセ文庫』γ 148-151。

(33) Pierre de BOISDEFERRE, *Vie d'André Gide*, Hachette, tome I [seul paru, 1970], p. 475.

(34) ドゥーセ文庫 γ 1579 (fo 51 vo, fo 52 ro vo)。「らくつかの指標」とはカイエ23の時期には他に見るべき出版物がないこと、インク書きの箇所、ベルギー人作家ルイ・デュモン・ワイルダンの名と、彼への抜刷転送を前以て依頼していたリュイテルスの名が併記されていること(リュイテルス宛一九〇七年六月一日付未刊書簡『トゥーセ文庫』γ 148-158 参照)。鉛筆書きの箇所、二つの名に「雑誌」(ひかり抜刷)ではなく、『詩と散文』誌と指示すること、二種類の記号を用いて、三十名(献呈用二十九部と恐らくジッド本人またはマドレーヌのための一部)にしぼるうとする形跡が明らかであること、また、礼状・署名入り献本の存在によって、実際に献呈をうけたと筆者が確認しえた約二十名が、ジョルジュ・エークツドを除いて、すべてインク書きの箇所に見られること等である。

(35) ジャムに限らず、作品を批判する同時代人の大半(たとえば、フィリップ・ジャン・ロマンク・キルナル、アンリ・クルアーン)が、放蕩息子子が家出する弟を見送る結末を攻撃の材料にしてゐる。

(36) ドゥーセ文庫 γ 1579 (fo 41 vo, fo 46 vo, fo 47 ro vo)。CJGに遺漏が多いことは編者マレも認めている。事実、一九八一年には、ジッドがジャムに宛てた約一四〇通の未刊書簡がパリのオテル・ドウルオで競売に付された。筆者の得た情報では第二信はこの中にもないようである。

(37) « Lettres à Beck », *op. cit.*, pp. 620-1.